文学部論集　第89号（2005年３月）

イギリス、フランスに所蔵される『アクバル会典』の写本について

近　藤　　治

〔抄　録〕

アブル・ファズルが16世紀末に著した『アクバル会典』は、ムガル朝インドの制度史を研究するための第一級の史料である。この書の写本はヨーロッパ諸国にかなり所蔵されており、本稿では大英図書館、オックスフォード大学図書館、ケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学東洋アフリカ学部図書館、フランス国立図書館に所蔵される30種に及ぶ写本の一つひとつについて、かなり詳しい検討と紹介を行なった。19世紀後半にベンカル・アジア協会から公にされた刊本は良心的な校訂による刊本ではあるが、限られた範囲の写本の校合に終っていた。本稿で示したような諸写本の検討は、今後この『アクバル会典』を援用した制度史研究を進めていくうえで欠かせぬ基礎的作業の一環に属するものであるといえよう。

キーワード　アクバル会典、写本、大英図書館、ボドレー図書館、フランス国立図書館

はじめに

近世インドの独裁君主として絶対主義的統治体制を確立したムガル朝第３代皇帝アクバルの時代の諸制度については、アブル・ファズルの著した『アーイーニ・アクバリー』（*Ā'īn-i Akbarī*）が詳しい。この書は、元来アクバル時代の正史としてアブル・ファズルの著した『アクバル・ナーマ』の第３巻として書かれたものであるが、優に巨冊の一書を成すに足る大部の分量を有し、また著者があたかも独立した書に付す如く巻頭に序文、巻末に結語と自序を付しているために、単独で一書として扱われるのが普通である。ペルシア語でアーイーンは制度を意味し、アーイーニ・アクバリーは「アクバル制度集」を意味する。『アクバル・ナーマ』のうちの制度について述べた部分を独立させて一書に編んだものである。これは、中国史の各正史のうち制度を論じた志の部分を独立させて会要と称したのと同じであり(1)、まさに『アクバル会要』に相当する。ただ「会要」は日常的にはなじみの薄いことばであり、これと

同義の「会典」が使用されてきた。本稿でもこの書を『アクバル会典』と呼んでいる[2]。

『アクバル会典』の写本は今日まで数多く残っている。私は1987年４月から1988年３月までの１年間、前任の追手門学院大学より海外研修の機会を与えられて英国に滞在したが、この間に『アクバル会典』の写本をできるだけ多く実際に自分の目で確かめることに努めた。英国に所蔵されるこれらの写本については、それぞれの写本目録で一通りの説明が与えられているので概要は分かるが、写本紙の材質、字体と筆跡、判読上の鮮明度、保存状態などの実際については詳しいことは何も分からない。そこで私は、どの写本も１葉１葉手で繰って、各葉の表裏すべてを点検することにした。私が滞英中に実見しえた『アクバル会典』の写本の数は、残存する同書写本の全体からすればきわめて限られたものである。利用できた写本所蔵機関は大英図書館（British Library）、旧インド省図書資料館（India Office Library and Records, IOと略記、現在は大英図書館に包摂されている）、オックスフォード大学ボドレー図書館（Bodleian Library）、ケンブリッジ大学図書館（Cambridge University Library）、ロンドン大学東洋アフリカ学部図書館（Library, School of Oriental and African Studies, SOAS と略記）、フランス国立図書館（Bibliothègue Nationale）である。これらの図書館には、ロンドン大学東洋アフリカ学部図書館の場合を除いて、『アクバル会典』をはじめとする各種写本の立派な目録が用意されており、私はこれらの写本目録をすべて利用した[3]。

以下においては、上に記した順序に従って各図書館に所蔵される『アクバル会典』の写本について説明していく予定である。小見出し代りに通し番号を付して各図書館とその写本請求番号を示し、各写本については写本目録記載の関連事項を最初に紹介した後、私が実見して確認したことがらを記していくこととする。

『アクバル会典』の写本30種

〔１〕British Library Add. 5609

293葉。13×８インチ。各ページ21行。各行4.75インチ。ナスターリーク体。18世紀作成。第５部「インド事情」のところは、末尾の部分を除いて、欠如。（Rieu, I, p. 252.）

いきなり目次から始まる。12葉。ただしこの目次には各項目の記述が始まる最初の葉数の記入はない。これは、写本全体を通した葉数の記入がないから当然のことだ。後世に記入された鉛筆書きの葉数番号はある。本文の冒頭には開巻扉の飾りはなく、直ちに Bismi-'llāh で始まる。各ページに枠取りは施されていない。各所に染み、虫喰い跡が見られるが、本文は鮮明。紙質は良質とはいえぬ。本文中の見出し項目は朱書き。第24葉裏（24ｂ）から第25葉表（25ａ、以下同様）の余白にペンと鉛筆による英文の記入が見られる。同じような記入は他にも随所にあり。62ab に武器の彩色図。68ａから紙質、筆跡ともに変わる。99ａや100ａその他の余白に171、173などといった算用数字が次の写本 Add. 5645中に見られるのと同一筆跡で記入されて

いる。これは明らかに両写本を対照し校合した跡を示したものである。余白のペンと鉛筆書きの英文も、写本 Add. 5645のそれと同一人物によって書かれたものと思われる。168ｂから再び筆跡が変わり、67ｂまでの筆跡と同一に戻る。しかし187ａ以下ではしばしばシカスタ体（崩し書き、草書体）風の筆跡が混入する。246ａから最初の筆跡と同一となる。結局この写本は３人の筆耕によって書かれたことが分かる。

〔２〕British Library Add. 5645

408葉。12.75×8.5インチ。各ページ21行。各行５インチ。ナスターリーク体。18世紀作成。（Rieu, I, p. 252.）

目次12葉は後世の作。各葉は朱の二重線と紺の単線の三重線で枠取りが施されている。本文冒頭部には黄金・赤・緑・青・黒で見事に描かれた開巻扉（ウンワーン　‘unwān）あり。各葉の番号は記されていないが、後世の筆になる大き目の洋数字が記入されている。本文中の見出し項目は朱書き。各葉の余白に朱筆の注記のあるところが処々見られる。58ｂ－59ａには武器の挿絵。赤・緑・黒で描かれているが、他の写本に比べ見劣りがする。68ｂ，70ｂ，82ｂ等には墨字の注記。125ｂ以下の各所には余白に夥しい英語のメモ書きが見られる。364ｂ－365ａには黄金・赤・緑で彩色された宝石図がある。

〔３〕British Library Add. 6546

599葉。10×6.5インチ。各ページ19行。各行3.9インチ。ナスターリーク体。シャージャハーナーバード（デリー）にて、ラフィーウッダラジャート即位元年、ヒジュラ暦1130年（西暦1718）[(4)]第１ジュマーダー月の日付。目次は巻頭と巻末の２箇所にある。筆耕は Rāmrāe Lachhmī　Narāyan。ムハンマド・シャー（在位1719－48）の治世第２年と第４年にシャージャハーナーバードとアーグラでこの写本と別の数種の写本との校合を行なった旨、末尾に記す。（Rieu, I, p. 252.）

表紙がなく、いきなり目次から始まる。目次の冒頭には Fihrist-i jild-i sīwum-i Akbar-nāma「アクバル・ナーマ第３巻目次」と記されている。la の開巻扉には７×５センチメートルの楕円形の印形の押印があり、所蔵者のものと思われるが、その末尾は sana-yi 1193と読める。とすれば、この印章は西暦1779年に刻されたものということになる。2.0×1.5センチメートルの同じく楕円形の小さな印形もあるが、文字は判読不能である。本文は各葉とも朱の二重線で枠取りが施されている。本文の文字は鮮明で、保存状態は良好。52ｂ－53ａの taṣwīr-i silāḥ（武器の図版）と題書されたところは白地のままで、刀剣類は描かれていない。535ｂ－537ａも白地。105ａ，106ａ等の挿絵は他の写本に比べて貧弱である。各葉周辺の余白には墨筆と朱筆の短い書き込みがあるが、後世の製本の際に上方余白の書き込みの切り落された葉が少なからずある。417，420などの葉には大きな図版の折り込みがある。本文末尾に３×２セン

チメートルばかりの印形があり、そこには筆耕ラームラーエーの名が読み取れる。巻末１－18葉にも、一層詳しい目次が付されている。これは一種の索引の役割を果たしている。写本の色調は油紙に近く、紙肉は厚薄が混ざっている。

〔４〕British Library Add. 6552

430葉。13.75×９インチ。各ページ21行。各行5.5インチ。ナスターリーク体。扉書き２つ。各葉に黄金線の枠取り。恐らく17世紀の写本。一部に湿気による汚れあり。第１葉から第12葉までの詳細な目次は、本文と同一の筆跡。(Rieu, I, p. 252.)

目次の各項目に該当する葉数は示されていない。　本文は12ｂから。　開巻辞 Bismi-'llāh-ir-raḥmān-ir-raḥīmi はチャイティア風の２つ目の開巻扉に黄金と青の筆で書かれている。第30葉までは各葉の下半分が冠水した如く相当ひどく汚れ、筆墨が薄れて読みにくい。他にもこのように汚れの甚しいところが何箇所かある。見出し項目が朱筆で書かれているのは、他の多くの写本と同様である。各ページは太い黄金線で縁取りされており、その外側をさらに青線の枠が取り囲んでいる。これらの枠取りの外の余白には何も記入されていない。46ｂ－47ａには黄金･赤・緑・黒を彩色した武器の見事な挿絵がある。367ｂ－368ａは宝石類の挿絵。汚れが多くて判読困難のところが少なくないが、筆写は非常に明瞭で良質。様式や紙質から判断すると、大英図書館蔵 Add. 7652の写本（本稿の〔６〕）よりもさらに古い写本であるとの感触を得る。この写本は、Add. 7652の写本とともにイルファン・ハビーブ教授の推奨する写本の一つである。

〔５〕British Library Add. 6553

159葉。12.25×8.25インチ。各ページ20行。各行4.75インチ。ナスターリーク体。『アクバル会典』第３部「国土」の部分の写本で、18世紀に成ったもの。(Rieu, I, p. 252.)

1a に「アクバル会典　ヒンドゥスターン諸州の事情」(Ā'īn-i Akbarī, Aḥwāl-i Ṣūbajāt-i Hindūstān) と記されている。そのすぐ下に Add. 6546の写本(本稿の〔3〕)と全く同一の大型楕円形の印形がある。この蔵書印によって２つの写本はある時期には同一所蔵者によって所有されていたことが分かる。こちらの方の印影は比較的鮮明であり、２行目は dīwān-i ṣūbajāt-i Bangāla u Bihār wa-ghairah（ベンガルおよびビハール等諸州の財務長官）とはっきり読める。所蔵者はベンガル・ビハールの州財務長官の任に就くほどの高官であった。印影の末尾は sana-yi 1193 Bangāla であったことがこの写本によって判明する。lb には朱筆で Aḥwāl-i du-wāzdah ṣūba（12州の事情）と書かれている。各葉の枠取りはなし。余白の注記もなし。本文は極めて鮮明な筆致。各州の地租徴収額等を記した表も、他の写本に比べ見やすい。巻末158ｂに巻頭と同一の楕円形の印章の押印がなされている。

〔６〕British Library Add. 7562

473葉。14.5×９インチ。各ページ19行。各行5.5インチ。ナスターリーク体の大きな字体。恐らく17世紀の写本。筆耕名は「カージー・ハミードゥッディーン・ナーゴーリー家出身のマフムード」(Maḥmūd az āl-i Qāẓī Ḥamīd al-Dīn Nāgorī)。第１ページの記録によると、ムガル朝第12代皇帝ムハンマド・シャー（在位1719－48）の治世第９年にこの写本を購入し同第13年に製本した、とされる。(Rieu, I, pp. 251－252.)

表紙左上隅に「アブル・ファズル編アクバル会典」(Ā'īn-i Akbarī ta'līf-i Abu'l-Faẓl) と記されている。筆跡は本文のそれとよく似ているので、筆耕マフムードの手で書かれたものかもしれない。目次は12葉。その冒頭には「第３部目次」(fihrist-i sīwum daftar) と書かれているが、これは『アクバル・ナーマ』第３部（巻）目次の意味であろう。本文第１葉上半分には金色と青を配色したチャイティア風の扉（ウンワーン）が描かれ、そこに Allāhu Akbar と書かれている。皇帝アクバル時代によく用いられた唱句。各葉は朱の二重線で枠取りされている。本文中処々に朱の上線（下線ではない）が施されている。二重線の枠取りの外側の余白には、墨筆で簡単な注記が記入されているが、なかには110ａのように余白全面に細字で書き込まれたところも散見される。22ｂには皇帝陣営の配置図が朱筆で描かれている。53ab の刀剣・鑓・弓矢等の武器の挿絵は赤・青・緑・黄金・黒を配色して克明に描かれている。408ab の宝石図も同様の配色で克明。本文は461葉、これに目次の葉数を合わせて総数473葉。現存最良と目される写本で、イルファン・ハビーブ教授の推奨するいま一つの写本である。

〔７〕British Library Add. 16,872

486葉。12×7.5インチ。各ページ19行。各行4.5インチ。ナスターリーク体。ヒジュラ暦1196年ズール・ヒッジャ月（西暦1782年11月）の日付あり。(Rieu, I, p. 252.)

ハードカヴァーの製本表紙の次の紙、いわゆる遊び紙に紙片が貼りつけてあり、それに英語で1805年９月と書かれている。その次の紙には、Ā'īn-i Akbarī とペルシア語で墨書した約５センチメートル四方の題箋が貼りつけてある。開巻扉のなかにはアラビア語の唱句「大慈大悲の御名にかけて」(Bismi-'llāh…) が書かれている。各葉には朱の二重線と紺の単線、都合三重線の枠取りが施されている。この枠取りの仕方は Add.　5645の写本(本稿の〔2〕)と全く同一の様式である。目次なし。紙質良好で、本文鮮明。紙の変色も少ない。余白の記入は、次葉冒頭語を各葉裏面（ｂ面）左下部に摘記すること以外なし。本文中の見出し項目を朱筆で書くのは他の写本と同様である。武器等の挿絵は省略されている。巻末に英語で Presented　by　the sons of Major William Yule 1847と記入されている。

〔８〕British Library Or. 1117

149葉。13×９インチ。各ページ21行。各行５インチ。草書風のナスターリーク体。明らか

に18世紀の写本。『アクバル会典』後半部の写本であるが、インド来訪の偉人たちを紹介した結末部の諸章は欠落。(Rieu, I, p. 252.)

各葉の枠取りはなし。余白に別筆の注記あり。朱筆の記入もあるが、その筆跡は本文のそれと近似しているので、本文を筆写した筆耕の筆になるものと思われる。表は朱線で表記。紙質は厚手の丈夫な紙。巻末部の文章は『アクバル・ナーマ』第3巻の完結という表現をとっており、『アクバル会典』をそのように位置づけている。

〔9〕British Library Or. 1679

189葉。6.25×3.75インチ。各ページ9行。各行2.12インチ。ナスターリーク体。1850年ごろに成ったインド諸州の記述部分の写本。だが各州の地租徴収額一覧等の表は欠如。カーブル州の記述の中途で終っている。(Rieu, III, p. 928.)

小版の写本。遊び紙の次の葉にはヘンリー・エリオットの蔵書印がある[5]。扉のタイトルは3行書きで、「アブル・ファズルの著作アクバル会典中の諸州事情」(Aḥwāl-i ṣūbajāt min Ā'īn-i Akbarī taṣnīf-i Abu'l-Faẓl) と記されている。非常に上質の紙を使用。写本にはめずらしく各葉の表裏、つまり各ページにページ数が打たれている。本文は374ページ。筆写書体は鮮明で、朱筆も併用。巻末には「1878年4月13日、ヘンリー・M・エリオット卿の子息より購入」と英語でかかれている。

〔10〕British Library Or. 1989

68葉。12.75×7.5インチ。ナスターリーク体。1847に成る。『アクバル会典』中の第3部「国土」のうちの「12州の事情」の記述のうち、デリー州シルヒンド県から始めてラホール、ムルターン、タッタ各州の諸県を経てカーブル州カシュミール県に至る記述、およびデカン地方のベラール州各県の記述を収める。この写本に付されたデリー発1847年4月8日付のSprenger博士の書簡によると、彼の所有する写本から筆写され、Navvāb Muḥammad Mīr Khān およびNavvāb Ẓiyā al-Dīn Khān がそれぞれ所有する写本によって校合された。(Rieu, III, p. 928.)

ヘンリー・エリオットの蔵書印貼付。Or. 1938, 1951, 1956, 1983と合わせて製本。この写本が取り扱う対象地域は主として西北インドの諸県で、今日のパキスタン、アフガニスタンの諸地方と重なるところが多い。朱筆で表の枠線を引き、そのなかに墨筆の文字によって地租徴収額を記した形の記述が中心を占める。枠外の余白に墨筆の注記がある。葉数番号は、写本前半では記入されず、後半のカーブル県のところから各葉表裏にページ数が記入され、巻末は36ページで終わっている。

〔11〕British Library Or. 2169

391葉。13.5×8.5インチ。各ページ21行。各行5インチ。鮮明なナスターリーク体。明らか

に17世紀初期の写本。後半部はかなり虫喰いの害を受けている。冒頭の12葉は本文と同一筆跡の目次。57ab と351ab には武器と装飾品の彩色した挿絵。最後のページに書かれた献呈（'arẓ-dīda）の奥書は判読困難となっているが、微かに16と31の年記が読み取れる。前の数字はジャハーンギール（在位1605－27）の治世第16年、後の数字はこれに対応するヒジュラ暦1031年を明らかに意味している。『アクバル会典』のテクストを校訂したヘンリー・ブロックマンは、この写本が彼が校合した15種の写本のなかでは最上のものであったと述べているが[6]、インド起源の用語や固有名詞の表記にはしばしば大きな写し間違いがある。(Rieu, III, p. 1070.)

第１葉表には書名が「アブル・ファズル・ムバーラクの著作アクバル会典なる書」(Kitāb-i Ā'īn-i Akbarī taṣnīf-i Abu'l-Faẓl Mubārak）と書かれ、その裏から目次が始まる。目次の書き方は、１ページに縦９マス横４マス都合36マスを作り、各マスに見出し項目と葉数を記入していく方法で、これは古いスタイルの目次の書き方。本文冒頭には黄金・青・朱・黒を彩色した見事な開巻扉。各葉には黄金の太細二重線の枠取り。太線の幅は約３ミリ、細線の幅は１ミリ程度。朱筆による記入や上線あり。筆写は見事な筆致。文字は鮮明。末尾に近いところの約10葉は虫喰いが激しい。恐らくこの写本の形が『アクバル会典』完成当時の写本形体をよく伝えているのではないかと推測される。つまりアブル・ファズルがアクバルに献呈した『アクバル会典』は、恐らくこのような写本形体ではなかったかと推定されるのである。第１葉表の表題の下部には W. Hamilton の署名があり、また製本の際に追加した末尾の紙には Bt（Bought）of the Widow of Col. Geo. William Hamilton 31 May 1879と記されている[7]。

〔12〕British Library Or. 1667

書名は Sharḥ-i Ā'īn-i Akbarī（アクバル会典注釈)。226葉。11.5×７インチ。各ページ13行。各行4.25インチ。ナスターリーク体。ヒジュラ暦1267年第１ラビー月（西暦1851）に成る。『アクバル会典』の抄本に注釈を施したもの。注釈家はデリー出身のナジャフ・アリー・ハーン（Najaf 'Alī Khān)。この写本はヘンリー・エリオットのために筆写されたもの。注釈家がエリオット宛に草した1851年２月21日付の書簡が付されている。(Rieu, III, pp. 928－929.)

枠取りなし。紙質、保存状態ともに良好。文字鮮明。葉数記入なし。目次なし。余白に墨筆、間々朱筆による本文と同一筆跡の注記。裏表紙の見返しに Purchased of the son of Sir Henry M. Elliot 13 Apr. 1878と記されている。

〔13〕British Library Or. 11629

341葉。23.3×22.3センチメートル。18－19世紀の写本。挿絵あり。(Meredith-Owens, p. 19.)

各ページ29行。目次なし。製本時に付した遊び紙にペルシア語で「アクバル会典第３巻」と書かれ、第１葉表には「アクバル・ナーマ第３巻」と書かれているが、いうまでもなく後者が

正しい。各葉は二重の朱線、その外側を一重の黒線、都合三重線の枠取りが施されている。本文はアラビア語の開巻辞「大慈大悲の御名にかけて」で始まる。見出し項目は朱筆。保存状態良好で、文字鮮明。12 b には皇帝の陣営の配置図が朱筆で描かれ、説明は墨筆で記入されている。32 b，33 a には黄金・朱・青・黒で彩色した武器の挿絵。95 b －99 a のアジュメール州の春作（rabī‘）と秋作（kharīf）の課税評価額を記述するところでは、表の枠線のみ朱筆で引かれ、数字を記入すべきところが空白となっているが、これは大英図書館蔵 Add. 7652（本稿の〔6〕）の154ab でもアジュメール州の春作と秋作の表の記入が空白となっているのと全く同様である。ということは、これら 2 つの写本が同系統に属する写本であったことを示している。とはいえ、277 b に牛面と犬面の鳥 3 羽が描かれているが、この挿絵は Add. 7652の写本にはない。305ab から後の各葉は大英図書館での補修が加えられている。

〔14〕 IO 6, Ethé 264

365葉。13.75× 9 インチ。各ページ21行。ナスターリーク体。最初の12葉は目次。51 b，52 a，241 b，332 a，332 b は白紙のまま。筆耕は Muḥammad Ḥusain Kāshī。筆写完了はズール・カーダ月17日とあるが、年号は欠如。(Ethé, I, p. 107.)

第 1 葉の表には後世の多くの書き込みと押印の印形がある。その最上段には「アクバル・ナーマ第 3 巻」(Jild-i siwum-i Akbar-nāma）と書かれている。裏側から透かして見ると円形の印形が 3 つ見えるが、表側には一面に大きな紙が貼り付けられているので見えない。その貼り付けの紙の上に方形の印形が 3 つある。そのうちの 2 つの印影は磨耗して読み取れないが、左辺上部に押印された残る 1 つには1168　Lachhmī　Nārāyan と刻されているのが判読できる。ヒジュラ暦1168年は西暦1754／55年で、ムガル朝第14代皇帝アーラムギール 2 世（在位1754－59）時代に当り、ラチュミー・ナーラーヤンが大英図書館蔵写本 Add. 6546（本稿の〔3〕）の筆耕 Rāmrāe　Lachhmī　Narāyan と同一人物だとすれば、彼はこの時代のころまで生存中であったことになる。しかも、この印形の右側には 3 行にわたって次のように書かれている。sih jild-i Akbar-nāma-yi tamām ba-qīmat-i yak-ṣad u sī u haft rūpiye kharīdagī（完全なアクバル・ナーマ第 3 巻を137ルピーの値段で購入)。この金額は相当の高額であるが、かの筆耗はそれを工面することができるほどに財をなしていたのであろうか。またこのページの最下段には E. I. Company Library と刻したイギリス東インド会社図書館の円形蔵書印が押されている。写本のサイズは35.0×23.0センチメートル。紙質が古く、虫喰いが進んでいる。

目次は12葉。この部分の綴じ方は間違っている。第 2 葉（f. 2）の次に来べきは f. 5 で、f. 3 と f. 4 は f. 8 と f. 9 の間に入れるべきである。つまり ff. 1，2，5，6，7，8，3，4，9，10，11，12の順で綴じられるべきであった。本文の各葉は左上隅にインド数字で通し番号が打たれている。本文は354葉。目次部を合わせた全葉数は366葉であって、エテのカタログにいう365葉ではない。本文が354葉であることは、開巻扉の上部にペルシア語で小さく354

waraq（葉）と書かれていることからも明らかである。イルファン・ハビーブは、この写本が古い時期のものであるにもかかわらず、大英図書館蔵 Add. 7652（本稿の〔６〕）の写しに過ぎないという[8]。そこで両写本を子細に対照してみると、目次は各葉表裏に縦９マス横４マス都合36マスを設け、そのなかに見出し項目を書く方法も、見出し項目名も全く同じ。ただしこの写本では綴じ方に齟齬が生じていることは上述の通りである。1b にウンワーン（'unwān）用の余地は設けられているが、空白のままで、ただアラビア語の開巻辞「大慈大悲の御名にかけて」が墨書されているのみである。一方、Add. 7652の方の開巻辞はアクバル時代に流行した「アッラーは偉大なり」（Allāhu　Akbar）であり、これから見ても当該の写本が Add. 7652より後の時代に作成されたものであるとするのは十分に首肯できる考え方である。第２葉以下を丹念に対校してみると、確かに両写本筆写の文章は完全に一致し、イルファン・ハビーブが指摘するように、この写本が Add. 7652写本を写したものであることはほぼ間違いないであろう。だがさらにもう一つの考え方として、双方の写本が筆写に利用した共通のさらに古い写本があったとする考え方も完全に否定し去ることはできないのではないであろうか。筆跡を比べて見てみると、Add. 7652の方がはるかに優れている。またこの写本は Add. 7652と同様各葉に朱の二重線の枠取りが施されているが、エテが指摘したところ以外に39ｂ，40ａ，181ｂ，230ｂ，321ａ，321ｂのように全ページ空白のところがある。

〔15〕IO 316, Ethé 265

379葉。13.12×8.75インチ。各ページ23行。鮮明なナスターリーク体。第２、第３葉並びに101－107葉は別筆のシカスタ体。24－27葉および104ａは空白。ヒジュラ暦1119年サファル月14日（グレゴリウス暦1705年５月17日）の日付あり。(Ethé, I, p. 107.)

31.8×21.5センチメートル。2b に短い不完全な目次。3a から本文。ウンワーンおよび各葉の枠取りなし。各ページ25行で、エテのカタログがいうように23行ではない。湿気による各葉の変色が相当進んでいるが、別筆のシカスタ体で書かれているところにはこのような変色は認められない。このことによって、別筆のシカスタ体の部分は後になって破損部を補修したところであることが分かる。製本は後世（最近）のもの。19ｂの皇帝陣営の配置図、45ａの武器の挿絵、89ｂ，90ａのゲームの挿絵などは描き方が貧弱。336ｂは空白。奥書は次のように読める。Akbar-nāma ba-ta'rīkh-i chahārdahum shahr-i ṣafar sana-yi yak-hazār u yak-ṣad u nūzdah-i Hijrī ba-khaṭ-i banda(?) Muḥammad 'Umar al-'āqibat bi-'l-'āfiya.（アクバル・ナーマ、ヒジュラ暦1119年サファル月14日、私めムハンマド・ウマルの筆によって無事完了）。

〔16〕IO 1114, Ethé 266

463葉。11.6×6.9インチ。各ページ19行。大字のナスターリーク体。筆写の日付の記入なし。ヒジュラ暦1196年（1782）にリチャード・ジョンソン氏が購入して所有していたもの。(Ethé,

I, p. 107.)

表紙、装丁は当初のまま。綴じ紙が破れて表紙が離脱しかけているが、風格のある装丁。29.1×18.1センチメートル。1a に M. Richard Johnson とペン書き。このページの中央部やや下寄りには次のように書かれている。 Kitāb-i sarkār-i nawāb-ṣāḥib mumtāz al-daula mu-fakhkhar al-mulk jām-i jang mistar Richārd Jānsun ṣāḥib-i bahādur dāma iqbāl-hu. (総督閣下の顧問にして王国の選良、国家の栄光、戦争の鑑なる勇士リチャード・ジョンソン氏 ── 願わくば彼の幸運が永続せんことを ── の書)。1b の上半分には彩色したウンワーン。そのなかに Ā'īn-i Akbarī と書名が書かれている。各葉は朱の二重線とその外側を黒の単線の計三重線によって枠取りされている。見出し項目は朱筆書き。本文の虫喰い、汚損はなく良好な保存状態。紙質から見る限りでは、18世紀後半の写本と推定される。余白への記入は見当らず。全巻同一筆耕の筆跡。

〔17〕IO 3142, Ethé 267

482葉。11×6.75インチ。各ページ19行。不均正なナスターリーク体。筆写の日付なし。(Ethé, I, p. 107.)

製本は後世のもの。1a 左上隅に Ayn Akbari とペン書き。ウンワーンあり、そのなかにアラビア語の開巻辞ビスミッラー…が記されている。直前の写本や直後の写本などと同様にこの写本も二重の朱線と一重の黒線の都合三重線の枠取り。筆跡はシカスタ体に近いナスターリーク体。見出し項目は朱筆。余白の記入なし。処々に虫喰いの跡。紙質とその変色ぶりから推定する限り、18世紀ないし19世紀初の比較的新しい写本と思われる。73ab はいずれも18行。当然朱筆で書くべきところがそうなっていないところもある。28.2×17.5センチメートル。目次はなし。482 b の本文の後には次のように書かれている。Tamām shud kitāb-i Ā'īn-i Akbarī tawārīkh-i mu'azzama min mu'allif-i Abu'l-Faẓl 'allāmī-fahhāmī bin Shaikh Mubārak-i ghafrullāh. (神の加護を受けしシャイフ・ムバーラクの子息、偉大なる学者アブル・ファズルの著わす大歴史書アクバル会典なる書は完了せり)。

〔18〕IO 2120, Ethé 268

342葉。12.75×6.75インチ。各ページ25行。ナスターリーク体。表のいくつかは空白のまま残されている。筆写の日付なし。カルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジの1825年記あり。(Ethé, I, pp. 107－108.)

表紙の裏側に College of Fort William 1825と印刷したシールを貼付。32.5×17.4センチメートル。各葉の葉数番号は b 面右上隅に墨書されており、これは当初のものであろう。1a と 342 b にはフォート・ウィリアム・カレッジの蔵書印（横長 6 センチメートルの楕円形で文字は陰刻）の印形があり、そのなかにペルシア語とサンスクリット語とベンガル語でそれぞれ

「フォート・ウィリアム・カレッジの書」と記されている。左上隅に角形の蔵書印があり、印影不鮮明で僅かに'Alī とのみ読める。上部に Ā'īn-i Akbarī とアラビア文字で墨書。その下に Ayeen akbury College of Fort William とペン書き。1b 上半分にウンワーン。各葉に朱の二重線と黒の単線、都合三重線の枠取りあり。見出し項目は他の写本同様に朱筆。虫喰い、変色はあるが保存状態はよい。18世紀後半の写本と推定される。筆跡は鮮明なナスターリーク体。

〔19〕IO 2407, Ethé 269

394葉。13.6×8.4インチ。各ページ23行。ナスターリーク体。相異なる２つの筆跡。388葉から391葉までは後世の補修。筆写の日付なし。虫喰いあり。85ab，97 b，98 a，124 b，155 b，170 b，171 a，198 a，294 b の表は空白。(Ethé, I, p. 108.)

最近の製本。35.0×23.0センチメートル。1a に Ayin Akberi とペン書き。1b に立派なウンワーン。そのなかにアラビア語の開巻辞ビスミッラー…が書かれている。黄金・朱・青の三重線で各葉の枠取りが施されている。虫喰い、汚損の甚しいところがあり、とりわけ167葉から202葉までの破損が激しい。各葉の表裏に薄紙による補強がなされているので、現在でも利用は可能であるが、虫喰いによる欠損部の割合は小さくない。写本作成の年記はない。当初は記されていたとしても、その部分が虫喰いにあって不明となったようだ。紙質・様式からして、これは明らかに17世紀の写本と思われる。アウラングセーブ時代の写本か。明晰なナスターリーク体。エテのカタログがいうように、388－391葉は別筆。ここでは各ページ19行で、枠取りは施されていない。しかし虫喰いは前後とほとんど変わることなく進行している。見出し項目は朱筆。表の枠は黄金線によって引かれている。第224葉から各葉中央部の虫喰い状態が巻末に至るほど激しく進行している。

〔20〕IO 1609, Ethé 270

454葉。8.25×4.5インチ。各ページ11行。シカスタ体。余白にしばしば注釈の記入あり。『アクバル会典』の抄録（Muntakhab-i Ā'īn-i Akbarī)。大きな表の筆写はすべて省略。451 b－454 b に索引。筆写の日付なし。(Ethé, I, p. 108.)

遊び紙には Johnson MS と鉛筆書き。題扉には、太陽に向かって裸足で祈祷するアクバルと思われる人物の立像が彩色して描かれている。肖像画の大きさは15.1×7.6センチメートル。黄金の枠取りが付され、その周辺には金箔が配されている。写本は21.0×12.1センチメートルの比較的小型版。各葉の番号は裏面右上隅に墨書され、全体で455葉（454葉ではない)。巻末の452 b 下半分から455 b までは全巻の目次（索引ではない)。1a の上部には Richard Johnson from Nath Midoletar who had it from the Vizier Sujah uldowlah とペン書き。その左上隅には印形があり、印影は Jaswant Rāe Sīw Bahādur, 年号の下２桁は18とのみ読める。シュジャー・ウッダウラ（Shujā al-Daula）は独立化したアワド王国第３代目のナワーブ（総督）

（在位1754－75）で、ムガル朝のワジール（財務長官）に任命された人物。この1a の中央部には Muntakhab-i Ā'īn-i Akbarī と別筆によるペルシア語のペン書きがある。1b には黄金色を多く配した立派なウンワーンが描かれている。

各葉は太い黄金線と、黒または朱または青の単線との二重線で枠取りされている。そしてその外側にはさらに二重の黒線で枠取りされており、補記や注記はこれら双方の枠取りの間の余白地に記されている。この余白地には黄金で図柄を描いたり、一辺約１センチメートルの四角の金箔を５ないし10枚縦に貼り付けているところが見られる。筆跡はシカスタ体に近いナスターリーク体。あるいは上筆のシカスタ体というべきかもしれない。朱筆によって上線を引いたり見出し項目を書いているところは、他の写本と同じ。上に指摘した豪華な写本の作成法からして、この写本はアワド王国のナワーブ、シュジャー・ウッダウラのために特別に用意された『アクバル会典』の精選集であると考えて間違いないであろう。66ａの皇帝陣営の挿絵は縁取りのみで未完成。97ａ，98ａ，99ｂ以下各所において、夥しい金箔を用いて作図した花柄を配したページがある。紙は比較的新しいタイプの上質紙で、虫喰い、変色、汚損はなく、保存状態は秀逸。筆写は『アクバル会典』第３部「国土」までで、第４部「インド事情」以下は省略されている。

〔21〕Bodleian Library 213, Ouseley Add. 165

437葉。21×12.25インチ。各ページ21行。大きな字のナスターリーク体。優れた写本。開巻扉と185ｂ，338ｂには黄金その他の彩色を施した豪華な装飾がある。各葉の余白はほとんどすべて補記や注記で埋められている。筆写年代の記載なし。(Sachau, I, p. 115.)

古い革の装丁。本文の前後にそれぞれ３枚ずつの遊び紙。これらの紙の質は本文のそれと全く同じ。53.4×31.8センチメートル、各行20.5センチメートルの大版の見事な写本。これまでに目にした『アクバル会典』の写本としては最大で、最も秀逸なもの。1b と2a の見開き２ページ全体が開巻扉（ウンワーン）となっている。その装飾は黄金・朱・青等の多色を配した豪華なもので、その外側に花柄をあしらった二重の縁取りが施されている。ウンワーンの右側ページの上部には Bismi'llāh-ir-raḥmān-ir-raḥīmi と記されている。2b 以下の各ページは黄金・朱・茶・黒・青の太い五重線で枠取りされ、そのさらに4.5センチメートル外側が黒の二重線で縁取りされている。そしてこの黒の二重線の線間には黄金色が塗り込まれるという手の入れようである。注記・補筆はすべてこの4.5センチメートルの余白のなかに墨筆細字で記入され、一番外側の余白には何も記されない形となっている。本文は太字の見事なナスターリーク体。余白の細字も本文の筆跡と同じ。見出し項目は朱筆。各ページは、そのほかに数語ないし数フレーズを朱書にして見た目のよさをはかっている。見出し項目の書き方は大英図書館蔵の古写本 Add. 6552や Add. 7652のそれと同様で、１行分をとってそれの中央部に書き入れている。全巻同一筆耕の筆になる。

53ａは全ページがアクバルの発案になるという砲身洗浄機の着色挿絵。その上に約半分の大きさの半開き状にした紙が貼ってあって図解を載せる。余白部に詳しい注記。100ｂはポロ競技の挿絵。104ａは８人でガンジーファ（ganjīfa　カード遊び）を楽しむ挿絵。130ｂから第３部「国土」の記述が始まる。表も完全に記載されているが、175ａの表からは数値がペルシア語の単語によってではなくインド数字で表記されている。185ａは空白。185ｂの上半分にウンワーン。このページから「12州の事情」の記述が始まる。321ｂは空白。しかしこのページの中央にṣaḥīḥ al-bayāẓ（白地でよし）と書かれている。338ｂの上半分にまたウンワーン。この直前で一連の表による表記が終り、第４部「インド事情」が始まるためであると思われる。389ａにはリンガ、391ａにはクリシュナをそれぞれ中央に配した挿絵がある。虫喰いが全くないといってよいほど良好な保存状態である。写本筆写の日付はないが、紙質や豪華な様式から見て、この写本は17世紀半ばのシャージャハーン時代のものではないかと推定される。

〔22〕Bodleian Library 214, Elliot 18

371葉。13.2×8.6インチ。各ページ21行。ナスターリーク体。処々に空白ページがあるが、本文が途切れることはない。第49葉は別筆。筆写の年記なし。(Sachau, 1, p. 115.)

装丁は英国製。背にAEIOON　AKBARIと金文字。目次は新しい紙質の４葉で表面のみ使用。これは明らかに後世に追加されたもの。本文は1aから開始。ウンワーンなし。各葉の枠取りもなし。見出し項目は朱筆。33.4×22.0センチメートル。各行13.2センチメートル。保存状態良好。挿絵、表もほぼ完備。ただし40abの図、121abの表をはじめ、243ｂ，256ｂ，265ａ，297ｂに空白が見られる。全巻同一の筆跡。本文末尾にKārikh Niẓāmなる人名が記されているが、これが筆耕の名前のはずである。紙質、様式から見る限り、17世紀後半のアウラングゼーブ時代の写本のように思われる。

〔23〕Bodleian Library 215, Fraser 163

370葉。13.2×7.9インチ。各ページ21行。ナスターリーク体。表用に用意されたページがいくつか空白になっている。161－164葉の順序は161，163，162，164が正しい。(Sachau, 1, p. 115.)

装丁に際して後世の紙２葉が一緒に綴じられ、そのうちの１枚には算用数字が一面に記入され、もう１枚には簡単な目次が記されている。これらの筆跡はもちろん後世のもので、写本の所有者が使用上の便宜のため作成したものと思われる。ウンワーンなし。各葉は二重の朱線とその外側の青線の都合三重線によって枠取りされている。見出し項目は朱書。本文は1bから始まり370ａで終わる。余白の処々に後世の墨筆の書き入れがある。33.5×19.8センチメートル。各行11.3センチメートル。写本作成時の目次はなし。74ａは空白。92ａのチャウパル・バージー（chaupar-bāzī　賽子競技）の図も、93ａのガンジーファの図も未完成。第３部「国土」は

110 b から始まるが、この部分の地租課税表等の表は省略されている。全巻同一の筆跡。虫喰い、汚損は認められない。このような保存状態と紙質、様式から考えて、この写本の作成はかなり新しく、19世紀の前半ないし半ば近くのものではないかと思われる。

〔24〕Bodleian Library 216, Ouseley Add. 147

350葉。12.4×7.5インチ。各ページ18行ないし19行。ナスターリーク体。2種の筆跡による筆写。装飾された開巻扉（ウンワーン）あり。筆写年代の記述はなし。(Sachau, 1, p. 115.)

製本は後世のイギリス製。1b 上部に黄金・青等で彩色したウンワーン。各葉は二重の朱線とその外側の青線の都合三重線から成る枠取り。見出し項目は朱筆。31.4×19.6センチメートル。各行15.5センチメートル。各葉の周辺部は変色しているが、本文の汚損はない。ザッハウのカタログに記されているように、この写本は2人の筆耕によって筆写されたものである。そのことは筆跡のみならず紙質の相違によっても、また1ページ当りの行数の違いによっても歴然としている。すなわち、1－105葉と238－300葉は各ページ19行、106－237葉と301－350葉は各ページ18行となっている。2人の筆耕の分担箇所は機械的に分けて別種の料紙が与えられたようであって、両者の分担部分が内容上截然と分けられる訳ではない。この写本は筆写の分担方法の一例を示すものとしても興味深い。巻末には次のように述べられている。Tamām shud kitāb-i Ā'īn-i Akbar〔*sic*〕min taṣnīf-i Abu'l-Faẓl bin Mubārak-i ghafru'llāh ta'ālā…（至高なる神の被護を受けしムバーラクの子息アブル・ファズルの著作アクバル会典の書は完了せり）。目次なし。写本としては紙質、筆跡、保存状態等から見て Bodleian Library 214の写本と同じころ、ないしそれよりもやや早期に成った感を受けるが、写本系統上の重要性については確信がない。

〔25〕Bodleian Library 2460, Ms. Pers. b. 5

314葉。16×9.25インチ。各ページ27行ないし30行。ナスターリーク体。ヒジュラ暦1234年ムハッラム月（西暦1818）の年記あり。(Beeston, 3, p. 5.)

装丁は革製で、当時のもの。最初の2葉は遊び紙。3b より本文。このページの上半部に黄金・朱・緑等を彩色したウンワーン。料紙は薄い青色。虫喰いが処々にあり。各ページは大半が27行。後半になると、169 a は30行、169 b －170 a は29行、264 a は30行、299 a は28行、299 b は25行、301 a は25行、301 b は26行というようにまちまちとなる。各葉40.6×23.3センチメートル。各行の長さは多少の長短があるが、27行取りのもので19.2センチメートル。見出し項目は朱筆。朱筆の上線も施されている。各葉は内側から順に朱線、黄金線、黒の重線、朱線の都合五重線による枠取りが施され、枠外の余白に墨筆での補記が散見される。目次なし。本文末尾に次のように書かれている。Kitāb-i Ā'īn-i Akbarī ba-ta'rīkh-i Ghurra-shahr Muḥarram al-ḥarām sana-yi 1234 roz-i yak-shanbih waqt-i shām ba-anjām rasīd.（アクバル会典

なる書は、新市にて1234年の聖ムハッラム月日曜日夕刻時に完了せり)。ここにいう「新市」（Ghurra-shahr）は恐らくカルカッタをさしたものであろう。全巻は同一の筆跡である。

〔26〕Cambridge University Library XCII, Nn. 3. 57

472葉。39.7×21.6センチメートル。各ページ17行。丹念なインド風ターリーク体の優良な写本。ベンガル・アジア協会刊の刊本第１巻は310b, l. 3で終わり、同刊本第２巻の結語は447b, l. 2から始まる。1785［ママ］年スラーワン月[9]に写本成る。(Browne, pp. 166-167.)

革の装丁。遊び紙に英語の鉛筆書き。これはカタログ作成者 Edward G. Browne の筆記と思われる。その内容が彼のカタログ内容とほぼ一致するからである。1a に The Ayeen akbari／The Mirror of Akbar／June 1782／200 rupees／Peter John Cullen／Ahmedabad July 17th 1701［ママ］と６行にわたるペン書きがある[10]。本文はこの裏面の1b から始まるが、ウンワーンは描かれていない。各葉には二重の朱線と一重の青線の都合三重線で枠取りされている。見事なナスターリーク体の筆跡。枠外余白への記入は比較的少ない。紙の変色は進んでいるが、保存状態は比較的良好である。各葉にはインド数字で葉数番号が打たれている。目次はなし。本文中の見出し項目は朱筆。50ｂ，51ab，57ab 等の表中の文字の記入は別筆のようである。121ａのチャウパルや122ａのチャンダル・マンダル（chandal-mandal　16人でする双六遊び）の絵は朱の線描のみ。武器の挿絵は省略。未完成の挿絵もある。あちこちに鉛筆書き。とりわけ339ｂ，340ａ－348ｂ，350ａ以下に夥しいが、これもブラウンの記入のようだ。第472葉は表裏とも空白。従って全体の葉数は471が正しい。墨筆のインド数字の葉数番号は479で終わっている。これは何箇所かで番号の記入の仕方に錯誤が生じたためであるが、ブラウンもカタログのなかで述べているように、各葉の綴じ方には問題はないようだ。

〔27〕Cambridge University Library 5

Edward Henry Palmer, *Catalogue of the Oriental Manuscripts in the Library of King's College, Cambridge,* Cambridge, 1867, p. 5に The Institutes of Akbar. By Abul Fazl.と簡単に紹介されている。

この写本はキングズ・カレッジから1960年にケンブリッジ大学図書館に移管された。革製の立派な装丁。この革表紙に四角の紙片を貼り付け、これにアラビア文字で42 Ā'īn-i Akbarī と墨書されている。これは、この写本が18世紀末にインドで購入され本国へ船送される際に付されたもののようだ。42は船送品の通し番号らしく、写本の背・天・地・小口にも記入されている。最初の４葉は遊び紙。５葉目の表に書名 Ā'īn-i　Akbarī を墨書。本文の始まる直前の1a に２行書きで書名と著者名。このページには2.4×2.1センチメートルの角形の印影があり、そこに Imtiyāz al-Daula…Bahādur Arslān-i Jang 1181と刻されているのが読める。ヒジュラ暦1181年は西暦1767年５月－1768年５月。1b から本文が始まるが、ウンワーンはなし。本文

は数えてみると551葉。28.5×16.7センチメートル。各ページ15行。各行11.0センチメートル。見事なナスターリーク体で全巻同一の筆跡。各葉は二重の朱線と一重の青線、都合三重線による枠取りが施されている。見出し項目は朱書。枠外余白に僅かな墨書があるが、これは本文中の欠落語の追記や誤記の訂正。33ａの皇帝陣営図は朱線で簡略に描かれるのみ。76ｂ－77ａの刀剣の挿絵は空白。79ｂの砲身洗浄機の挿絵も粗雑。171ａの下半分から第３部「国土」が始まり、347ａ冒頭から第４部「インド事情」が始まる。475ａの装身具の挿絵予定ページが空白であるように、挿絵のところが描かれずに空白のままのところが、ほかにも散見される。551ａ半ばで本文は終わっているが、奥書（コロフォン）相当部がないので筆写年代も筆耕名も分からない。巻末の遊び紙は３葉。紙質は上質。虫喰い、汚損はほとんどなく、非常に良好な保存状態。18世紀後半の写本のようだ。

〔28〕SOAS Accession No. 46721

416（421）葉。29.5×17.0センチメートル。各ページ21行。ナスターリーク体。目次はなし。見出し項目は朱筆。製本は写本作成当時のもの。各葉には左上隅に墨筆で葉数番号が付されている。遊び紙に墨筆で次のように書かれている。Kitāb-i Ā'īn-i Akbarī. Kharīd-i ḥussānī az Niyāz 'Alī dar Baroda sana-yi 1284 Hijrī. Qīmat-i 25 rūpya.（アクバル会典なる書。ニヤーズ・アリーよりバローダにてヒジュラ暦1284年の願ってもない購入なり。価格は25ルピー）。ヒジュラ暦1284年は西暦1867年５月－1868年４月。本文は1bから。このページの上部には黄金を配したウンワーン。各葉には二重の朱線と一重の青線、都合三重線による枠取り。写本の冒頭部にはかなり虫喰いが見られるが、全体としての保存状態はよい。紙質は劣る。全巻同一人の筆跡。ただし筆写後に本文の校合はされなかったのか、余白の補足・訂正の記入はない。第２部「軍隊」は80a, l. 3から始まり、第３部「国土」は128a, l. 1から、第４部「インド事情」は273a, l. 19から始まる。第３部では表による表示はなく、各州各県の郡毎に数字で税額等が表示されているだけである。これは写本が小型で、表による表示が困難だからであろう。第365葉の次に再び361－365の葉数番号が記されているが、ここは当然366－370とすべきである。従って、最後の葉数番号は416となっているけれども、正しくは421の葉数番号を付すべきであった。巻末の遊び紙は７葉。筆耕名、年代の記入はなし。この写本が成ったのは比較的新しく、19世紀初のものではないかと思われる。

〔29〕Bibliothèque Nationale Suppl. Pers. 277, Blochet 577

この写本はMaster Ladkens(?)という名のイギリス人のために筆写されたもの。非常に優れたインド風ターリーク体で書かれている。筆耕はDjihanabad郡に属するMendiran要塞の住人Mounir ed-Din Mohammedで、時にヒジュラ暦1187年（西暦1773）のこと。532葉。28×21センチメートル。緑色の革の装丁。（Blochet, 1, p. 341.）

巻頭の遊び紙に次のようなペン書きがある。Volume de 532 Feuillets. Le Feuillet 103 est blanc. 23 Mars 1874. この遊び紙の裏面上部に Instituts of Emperor Akbar と鉛筆書き。その下に10行に及ぶ『アクバル会典』のペン書きの説明文が書き加えられている。各葉の左上隅に算用数字のペン書きで葉数番号が付されており、532で終わっている。各葉28.8×21.0センチメートル。各ページ19行。ナスターリーク体。通例の写本と同じように本文は1b から始まる。ウンワーンはなし。各葉の枠取りもなし。朱筆の見出し項目と上線は他の写本と同様。各ページの余白および行間に訂正・校合のあとを示す墨筆の補記。虫喰い・汚損はほとんどなく、全体の保存状態はよい。第２部「軍隊」は98b, l. 6から、第３部「国土」は149a, l. 1から、第４部「インド事情」は328a, l. 7からそれぞれ始まる。空白は103ab のみならず、38ａ，193ab，197ａ，337ｂなどにも見られる。巻末532ｂの下部に朱筆のコロフォンがある。その一部をここに紹介しよう。Jild-i sīwum-i Iqbāl-nāma ki mushtahar ‘urf-i Ā’īn-i Akbarī ba-ta’rikh-i hashtum māh-i Bhādon muṭābiq-i chahārdahum shahr-i Jumādā al-Ṯānī ba-roz-i yak-shanbih ba-waqt-i yak u nīm-pās sana-yi 1187 Hijrī.（アクバル会典としてよく知られている吉祥の書の第３巻は、ヒジュラ暦1187年のバードーン月[11]８日すなわち第２ジュマーダー月14日日曜日の１更半の時[12]に成れり）。本写本説明の冒頭に紹介したように、ブロシェはカタログ中の解説で筆耕名等を挙げているが、このコロフォンによって判明するところに従いもう少し正確に記してみると、この写本の所有者（mālik al-kitāb）である高徳の御方（ṣāḥib-i wālā-manāqib）のラードキンス様（Mister Lādkins）のために、ムニールッディーン・ムハンマド・サーキン（Munīr al-Dīn Muḥammad Sākin）がブルドワーン県（chakla-yi Burdwān　ベンガル地方南西部の県）に属すジャハーナーバード郡（pargana-yi Jahān-ābād）のマンダーランの御城（ḥaẓrat qil‘a-yi Mandāran）において作成したのであった。その年は、イギリス東インド会社がベンガル地方等における徴税権を獲得してまだ８年ばかりしか経っていなかった。

〔30〕Bibliothèque Nationale Suppl. Pers. 1202, Blochet 578

18世紀末の平凡なインド風ターリーク体の写本。533葉。33×18センチメートル。赤革の装丁で、Béha ed-Din Péshavéri の署名、捺印がある。（Blochet, 1, p. 341.）

装丁は写本作成当時のもので、これに「バハーウッディーン・ペシャーワリーの作」（‘amal-i Bahā al-Dīn Peshāwarī）と刻されている。各ページ21行。本文は1b から始まり、上部に黄金で彩色したウンワーンがある。各葉は黄土色の太線と朱・青の細線の三重線の枠取りが施されている。その外側にさらに青線の枠取りが設けられており、この外枠と内枠との間の余白部に墨筆と朱筆で書き込まれた夥しい注記がある。本文はナスターリーク体。各葉左上隅の葉数番号はペン書き。見出し項目は朱筆。26ａの皇帝陣営の配置図は未完成図。29ｂに書き直しの配置図が追加されている。61ab，63ab，64ab，67ab などには、写本各ページの行間

を揃えるための書写用定規（misṭar ミスタル）を押えつけたために生じた糸筋の跡が消えずにまだ残っている。これは、写本ではめったに目にすることのできない希少の事例である。ミスタルは、厚紙の両端に一定間隔で孔を穿ち、これに太目の糸を通して平行条にした定規。この上に写本用の料紙を置いて押えつけると、平行の糸筋跡が料紙に生ずる。その糸筋跡を基準にして筆写していけば、各葉とも行間がきれいに揃うことになるのである。料紙の大きさや所定の行数がいくらであるかによって、ミスタルの様式は当然異なってくる[13]。ミスタルによって生じた糸筋跡は、筆写が終って程なくして自然に消え去るのが通例であるが、料紙の質によっては長く残るものもある。そのケースが今回の写本の事例なのだ。関連する各葉を子細に観察してみると、61 a のミスタル線は凸状で、61 b は凹状。一方67 a のミスタル線は凹状で、67 b は凸状。このように、各葉の表面は凸状のミスタル線のついた方にするというようには必ずしもなっていなかったことが分かる。ただ確かなことは、各葉の表面裏面ともに、それぞれの行の中心線がミスタル線の上におかれていることである。

57ab，58 a，128ab のように空白のままとなっているところが目につく。第 3 部「国土」は143a, l. 2から、第 4 部「インド事情」は396a, l. 10から、また最後の第 5 部は502 b 冒頭部からそれぞれ始まる。処々に小紙片が綴じられ、これにペルシア語の注記が書き込まれているが、これは各ページの余白に書き切れなかった注記の続きを記したものである。全巻は同一の筆跡である。

おわりに

以上、イギリスの大英図書館、旧インド省図書資料館、オックスフォード大学図書館、ケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学東洋アフリカ学部図書館、並びにフランスの国立図書館に所蔵される『アクバル会典』の写本30種の一つひとつについて、既存の写本目録の関連箇所を摘記した後に、私が直接手にとって調査した記録内容を紹介した。イギリス、フランスの恵まれた環境の図書館で、これらの写本をじっくり調べることのできる機会をえたことは、私にとって幸運であった。今回の調査記録の報告が、今後これらの写本を研究していこうとされる人々にとって何がしかお役に立つことができれば幸いである。

ロンドンの王立アジア協会（The Royal Asiatic Society）に『アクバル会典』の優良な写本が所蔵されていることは、かねて W. H. モーリーの写本目録によって知っていた[14]。この目録によると、CXVI（116）の写本番号が付されたこの写本は、324葉、14.75×10インチ、各ページ25行取りで、優美なナスターリーク体で書かれ、ヒジュラ暦1066年（西暦1655）に成ったものである、という。私のロンドン滞在中は王立アジア協会図書館の改装期間と重なり、閲覧の許可をえることができなかったのは残念なことであった。いつか機会があれば、ぜひ閲覧したいと願っている。またシャルル・シェフェルのカタログは、その No.1333として17世紀の

『アクバル・ナーマ』の優れた写本なるものを紹介しているが（Schefer, p. 70)、この写本には第３巻の『アクバル会典』相当部が含められていないことが今回の調査で判明した。

イギリス、フランスには上記以外のところにも『アクバル会典』の写本は所蔵されている。また両国以外の欧米諸国やインド、パキスタンにも、この作品の写本を所蔵するところが少なくない。本稿では、これらについて全くふれることができなかった。現存する『アクバル会典』の写本の所蔵機関については、C. A. Storey et al., *Persian Literature : A bio-bibliographical survey,* 5 vols., London, 1927-2002, Vol. I, Part 1 : *Qur'ānic Literature, History,* 1927-1939, reprint, London, 1970, pp. 549-550, Vol. I, Part 2 : *Biography, Additions and Corrections, Indexes,* 1953, reprint, London, 1972, pp. 1314-1315およびD. N. Marshall, *Mughals in India : A bibliographical survey of manuscripts,* London, 1967, reprint, London and New York, 1985, pp. 33-34によってほぼ確認することができる。ただし、これら２つの文献は刊行後かなり年数が経っており、新出写本の記載漏れがあることに留意しなくてはならない。

なお、『アクバル会典』の刊本としては、Sayyid Ahmad Khan編の２巻本デリー版（1855年)、Nawal Kishor社刊の３巻本ラクナウ版（1869年)、同じくNawal Kishor社刊の３巻本ラクナウ版（1881－82年)、H. Blochmann編の２巻本ベンガル・アジア協会版（1872，77年)、このベンガル・アジア協会版をドイツのオスナブリュックから刊行した覆刻版（1985年）がある。このうち、３巻本ラクナウ版（1881－82年）は、イルファン・ハビーブ教授がいうようにベンガル・アジア協会版のほぼ完全な写しである。

今回の写本調査に際しては、イギリスとフランスの次の図書館の閲覧室において厚遇を賜った。すなわち、大英図書館のDepartment of Oriental Manuscripts and Printed Books, India Office Library and Records[15], Bodleian Library Oriental Reading Room, Cambridge University Library Manuscripts Room, Library of the School of Oriental and African Studies, Bibiothèque Nationaleである。ここに記して改めて謝意を表する次第である。

〔注〕

(1) 宮崎市定「アンスチチューションの学」『思想』第644号、1987年２月、『宮崎市定全集』23、岩波書店、1993年、507－508ページ。

(2) 佐藤圭四郎『イスラーム商業史の研究 ── 附東西交渉史』同朋舎出版、1981年では、『アクバル会典』の書名が一貫して使用され、重要典拠としてしばしば援用されている。『アクバル会典』なる書名の定着については、近藤治『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会、2003年、49－50ページ参照。

(3) 〔i〕《British Library》Charles Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum,* 3 vols., London, 1879-83, reprint, London, 1966 ; do., *Supplement to the Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum,* London, 1895, reprint, London, 1977 ; G. M. Meredith-Owens, *Handlist of Persian Manuscripts 1895-1966,* London, 1968. 〔ii〕《India Of-

fice Library and Records» Hermann Ethé, *Catalogue of Persian Manuscripts in the India Office Library,* 2 vols., Oxford, 1903-37, reprint, London, 1980. 〔iii〕«Bodleian Library» E. Sachau, *Catalogue of the Persian, Turkish, Hindûstânî, and Pushtû Manuscripts in the Bodleian Library,* continued, compiled and edited by Hermann Ethé, Part 1 : *Persian Manuscripts,* Oxford, 1889 ; A. F. L. Beeston, *Catalogue of the Persian, Turkish, Hindustani and Pushtu Manuscripts in the Bodleian Library*, Part 3 : *Additional Persian Manuscripts,* Oxford, 1954. 〔iv〕«Cambridge University Library» Edward H. Palmer, *Catalogue of the Oriental Manuscripts in the Library of King's College, Cambridge,* Cambridge, 1867 ; Edward G. Browne, *A Catalogue of the Persian Manuscripts in the Library of the University of Cambridge,* Cambridge, 1896. 〔v〕«Bibliothèque Nationale» M. Charles Schefer, *Catalogue de la collection de manuscripts orientaux arabes, persans, et turcs,* Paris, 1900 ; E. Blochet, *Catalogue des manuscripts persans de la Bibliothèque Nationale,* 4 tomes, Paris, 1905-34.

(4) ムガル朝第10代皇帝ラフィーウッダラジャートの即位は1719年2月28日、退位は同年6月5日であるので、正しくはヒジュラ暦1131年（西暦1719）としなくてはならない。

(5) ヘンリー・エリオット卿はドーソンの協力を受けた8巻本のインド史の編著者として著名である。Henry Miers Elliot and J. Dowson, *The History of India as told by its own Historians : The Muhammadan period,* 8 vols., London, 1867-77.

(6) Abu'l-Faẓl, *Ā'īn-i Akbarī,* ed. by H. Blochmann, 2 vols., Calcutta, 1872, 1877, Vol. I , preface, p. 1. ここでブロックマンは次のように述べていた。「この写本は古く、私が校合する必要のあったすべての写本のうちでは最上のものではあるが、優秀な写本では決してない」。

(7) *Ibid.,* p. 1によると、この写本のもとの所有者はColonel George William Hamiltonであった。

(8) Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707,* 2nd revised edition, New Delhi, 1999, p. 468. ここでも、またこの書の初版(1963)p. 411においても、'only a copy of Add. 6752'と記しているが、6752は7652の誤植である。

(9) sarāwanまたsāwanとも。サンスクリット語śrāvaṇaの転訛形。ヒンドゥー暦の4月で太陽暦の7－8月に当たる。

(10) 「アーイーニ・アクバリー」に対応する英語名を「アクバルの鏡」（The Mirror of Akbar）としているが、これはペルシア語のā'īnをā'īnaと誤解したためと思われる。

(11) ヒンドゥー暦の5月で太陽暦の8－9月に当たる。

(12) ここで更（こう）と訳したペルシア語のpāsは1昼夜の8分の1の長さ、つまり3時間をさす。1更は朝6時から3時間後すなわち午前9時を意味し、従って「1更半の時」は午前10時半を意味する。インドにも昼夜をそれぞれ4区分し、その単位をパフル（pahr, またパハルpaharともいう）として時間および時刻を示す伝統的な考え方があった。インドのパフルとペルシアのパースは、正に対応関係にある。詳しくは近藤『ムガル朝インド史の研究』372－374ページ参照。

(13) ミスタルについては、近藤『ムガル朝インド史の研究』366－367ページ参照。

(14) W. H. Morley, *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland,* London, 1854, p. 112.

(15) 1998年以来、大英図書館のセントパンクラス敷地への移転開業に伴い、これら2つの施設は統合されてOriental and India Office Collectionsとなり、大英図書館に直接包摂されている。

（こんどう　おさむ　人文学科）
2004年10月15日受理